

# 江戸時代(近世)環境文学について

渡辺憲司

江戸の環境文学を考える際に留意すべきことは、世界史的には使われていない「近世」という呼称が使われていることだ。中世の封建社会の制度を強く残存させながら、江戸時代では、出版文化の成立・庶民の「エクリチュール」認識、被教育層の拡大、読者層の拡大など近代に匹敵する土壌が生まれたという歴史への視座が重要である。

江戸時代を近世という時代でくくることは、きわめて特殊的な江戸時代の特徴を示している。世界史的に見れば、近世と呼ぶことは異例である。中世後期と呼称する方が適当であろう。しかし、我々は江戸時代を近世と呼ぶ。中世と近代の狭間にあるこの時代の特異性をまずもって考えることは、江戸時代の環境文学への視座を考える時にもひとつ重要な課題であることは間違いない。

封建的取奪関係や身分制度を脱却して、市民が自立的に権利を持ち近代という時代が到来する。江戸時代が自立的な人権意識をもっていたなどとはもちろん到底考えられない。江戸時代の文学に人権というキーワードは存在しない。しかし、武士という支配階級の下にあって、町人はその自立的権利を獲得していったことは確かである。その性格がもっともよく表れているのが、文学世界であろう。文学世界の主役ことにその読者層は、<庶民>であった。

1603年頃に成立した『日葡辞書』には、「Xomin (シヨミン)。モロモノ タミ」とある。「諸民」という表現も常用されている。明治元年(1868年)に発布した「五か条の御誓文」では、「官武一途庶民に至る迄、各其志を遂げ」と云った文言がある。庶民は「官武」即ち「朝廷と諸侯、公卿と諸侯」をのぞく、所謂四民<士農工商>のみならず僧侶、遊女などをふくむ諸々の民への呼称である。

文学は、読者の存在なしに成立しない。江戸時代以前の文学と江戸時代の文学が明確に一線を画しているのは、読者層の拡大である。16世紀後半から17世紀初頭までのキリシタン文化の到来及び韓半島への侵略によってもたらされた古活字本の技術の習得は、庶民の出版文化に大きな影響を与えた。又さらにその発展的技術成長の結果とも云うべき版本の流布は、飛躍的な作品数を生み出していった。

版本は、文字を個々のものとしてではなく、<面>としてとらえる結果を生んだ。漢字は個別的に独立したものが、漢字と仮名の混じった日本語は、連綿体であり、版本に一面で表現する。日本が東アジアの漢字文化圏に属しながらも、特異な庶民文化を生み出していったのは、字形の連綿性による<面>把握と、版本に使用される原材料「桜」の存在である。桜は、日本各地に生育し、出版界に安価で提供された。それは、版本技術において先進国であった中国をはじめとする東アジア漢字文化圏において、版本が高級品として存在した状況と異なったものだ。版本の材料である版木また安価な再生和紙の提供は、高温多湿な日本の

自然環境が生み出したものであると云えよう。面として紙面をとらえることは、挿絵を簡便にし、絵と文章を一体化することによって文学の庶民化、大衆化を促進したのである。

そして、作品、作者の多様性ととも読者数の庶民への広がり江戸時代以前と江戸時代では比肩不可能な増大となった。文学の大衆化、出版文化の成長は、日本の中世にはなかったものである。そこで情報を得た江戸の庶民は、文化を培っていったのである。その読者拡大と情報量の拡散は、近代の器に比肩するものであると云っても過言ではない。しかし、大多数の庶民は、封建制の中に埋没し、被支配階級から脱することはなかった。理念として有していたのは、きわめて強固な封建意識である。

頭の中は、中世的、非近代的でありながら、手足は脱中世的であり、近代的感覚を有していたのである。このアンバランスな性格が、江戸時代を世界史的には常用されていない「近世」と呼ぶ所以である。江戸時代の環境文学を論ずる時、又話題とする時、我々がまず念頭に置かなければならないのは、中世封建制の色濃い残像と近代の萌芽が江戸時代<近世>の中で混在して、特異な文化を作り上げていったことである。

江戸時代文学における読者層の拡大において、版本の果たした役割が、大きなものであることは、言を俟たないが、もとより写本による伝搬も又大きな広がりを見せた。それは読者の拡大というよりは、作者層の広がりである。そして作者の姿勢そのものが写本において色濃く示されていることも事実である。多くの人々の間で、「書く」という意識が芽生えたのが江戸時代である。

その背景にあったのは、江戸時代における寺子屋の増大である。『日本教育史資料』によれば、江戸時代初期元和の頃までは、実数17校、10年に1校ほど(寺子屋年度拡散指数、0.1)であったのが、享保の頃には、江戸府内で800校あまりの寺子屋があったという(『兼山麗沢秘策』)。そして寛政の頃には、年に13.8校が開設、さらに天保期になると、56.3校、文政期で141.7校、幕末の慶応で年平均の開業が306.6校という数字を示している。そして寺子屋数は、大都市はもとより、城下町、宿場町、門前町さらには、農漁村まで3から4万という膨大な数の寺子屋が全国に広まったのである。寺子屋は、藩校と云った武士対象のものではない、武士を含めた庶民の教育機関である。そしてさら

に、江戸・大坂・京都といった大都市部では、女性の寺子屋師匠が、多くの比率を占め、江戸の神田・日本橋・浅草のような町人の多く住むところでは、3人に1人くらいが女性であった。このような庶民教育の広がり、おそらく諸外国と比較しても、もとより東アジアの諸国と比較しても特質として評価すべき点である。

<出版文化の成立><読者層の拡大><一般庶民の書くことの認識><教育の普及>このことは、江戸時代の文学ことに環境文学を考える際の前提なのだ。

別所真紀子（『言葉を手にした市井の女性たち 俳諧にみる女性史』（オリジン出版センター 1993）は、日本の女性文学史がその伝統を永く息つき、女性が文筆を操るのは珍しくない」と述べた後で、次のように述べている。

「けれども、世界中どの国の歴史もそうであったように、文芸は（他の芸術もそうであるが）宮廷を中心として始まり、その周辺の一部の所有物であり、一般の民衆は永く「書言葉」<sup>エクリチュール</sup>を手中にし、世に発表して名を知られることはできなかった。東歌のように、庶民の声とみられても記録者はべつであり、その発語者の名もとどめられることはなかった。書くという行為、さらに書く内容を創り出す思考、そして書いたものを版本として広く世に表わすという営為が、庶民の参加するところとなったのは確かに俳諧以降である。」と。

俳諧において顕著なものであろうその傾向は、江戸時代、ことに宝暦以降の後期の時代においては、同時代の文芸に共通して言えることであろう。

江戸時代、近世と呼ぶ時代の環境文学を考える時いささか考えておかねばならないことの所感を述べた。

---

渡辺憲司（わたなべ・けんじ）1944年北海道生まれ。立教大文学部日本文学科卒。立教大学名誉教授。江戸文化・文学専攻。単著『生きるために本当に大切なこと』（角川文庫 2021年2月）『江戸遊里の記憶 苦界残影考』（ゆまに書房 2017年6月）共篇『江戸川乱歩事典』（勉誠社 2021年3月）A KAMIGATA ANTHOLOGY LITERATURE FROM JAPANS METRO CENTERS,1600-1700 スミエ・ジョーンズ共編（ハワイ大学出版部、2020）